

九州民放クラブだより

地震お見舞い

ありがとうございます

九州民放クラブ熊本

会長 今村 雄一(RKK)

去る4月14日、16日の両日は、かつて経験したことのない震度7以上の激震に、二度も続けて襲われた正に恐怖の日でした。

民放クラブ熊本のほとんどの会員は震源地の益城町中心部から半径15キロの範囲内に居を構えております。本震後も絶え間なく続く震度4以上の強い余震に、不安を抱えての毎日を過ごしました。甚大な被害を被ったとはいうものの、わがクラブ会員からは一名の犠牲者を出すこともなく避難出来たと聞いて安堵した次第です。

地震発生直後、早々に九州のクラブをはじめ他の民放クラブからも、安否確認、激励電話やお見舞いのメールが夫々届きました。

其の後も全国のクラブから続々と心暖まるお見舞い・義捐金を頂き心から御礼を申し上げます。

知識洋治事務局長から「地震で被災された熊本クラブに見舞金を贈ろうと各地で募金が始まり、振込先を教えて欲しいという問い合わせが来ている」との連絡で支援の輪が全国に広がっていることを知りました。

6月10日、日本民放クラブ総会(東京)で議事の冒頭、「熊本に被災見舞金を贈呈したい」との緊急提案があり、全会一致で承認して頂きました。その経緯は会報122号の巻頭に紹介されています。

「夢であつてほしかった」との言葉は、余震が1900回を超えていた7月24日、益城町で開かれた震災犠牲者慰霊祭で遺族代表の挨拶にありました。この慰霊祭に出席した蒲島郁夫熊本県知事は「熊本には地震は来ないという過信があったかもしれない」と県民の地震に対する意識のレベルを代弁しました。

「夢であつてほしかった」という現実の状況は『民放くらぶ』122号の「九州民放クラブだより」

の枠に、わがクラブ園田洋一郎元会長が的確な表現で紹介しましたのでご一読ください。

遺族代表と同じ言葉をつぶやいたのは、益城町在任の会員濱邊正前理事です。本人は、本号の「会員だより」に寄稿していますので、念のため。

7月21日、理事会を開き見舞金の取り扱いについて協議しました。協議の結果は「全国各地のクラブから頂戴したご芳志は、全員が被災者である会員で分かち、今からの力の泉にしよう。園田元会長のように家屋の取り壊しを余儀なくされ、自宅に住めなくなった会員には手厚く配分しよう」と全会一致で決定し、会員全員に送らせて頂きました。

8月1日現在、お見舞金総額は、1,401,000円に達しました。未活用のお見舞金は、熊本の復興の先にあるべき姿をイメージして、会員の意向を踏まえてクラブ一丸となつて出来ることに活用したいと思ひます。

つい先日、行方不明となつてい



立入り禁止一部緩和で観光客が戻った熊本城

た大学生が発見収容されました。高速道路は、未だに片側通行や路側が波うったままです。

四カ月経った今でも被災処理に手間取ったり、未だ手がついていない部分が多くあるものの、復旧、復興へ向けての各方面からの様々な救済策により徐々に元気を取り戻しつつある熊本です。

未筆ながら、皆様のご支援に重ねて感謝し、厚く御礼申し上げます。

ありがとうございます。

『頑張るばい くまもと!』